

あわせて小出檜重の“温気”を思う

《フェルメール研究(わが町に何を注ぐか)》の答えは?



「モリムラ@ミュージアム」の外観(住之江区)、元は家具のショールームだった。

新しい現代美術の美術館が誕生した。大阪に生まれ、市内にアトリエを構える国際的アーティスト、森村泰昌さん(1951～)が、昨年11月、住之江区に開いた個人美術館「モリムラ@ミュージアム」である(略称は、M@M)。大阪メトロ四つ橋線北加賀屋駅に降りると「こんなところに?」と、戸惑うような、木津川や工業地帯に近い地域にミュージアムはある。

千島土地株式会社の特別協力を得て、家具のショールームをリノベーションしたもので、どこか懐かしい建物の外観を生かし、内部を改造した約400㎡の空間に、「白い闇の回廊」(Gallery I)と「時をかける箱庭」(Gallery II)の大小2つの展示室があり、ミニシアター「ギ・装置M」、ライブラリー&サロン「記憶の樹」、ミュージアムショップ「森村屋商店」を設けた。つんとすました“神殿”のような文化の殿堂ではなく、大阪という街や人、そして現代を感じさせる個性的なスペースである。

森村さんは、ゴッホの自画像に自ら扮した大型カラー写真によるセルフ・ポートレート作品などで知られ、美術史上の名作がテーマの「美術史の娘」シリーズや、マリリン・モンロー、「極道の妻たち」の岩下志麻さんに扮した「女優」シリーズ、20世紀の歴史上の人物に扮した「なにものかへのレクイエム」などを発表してきた。

国立国際美術館で「森村泰昌：自画像の美術史—「私」と「わたし」が会うとき—」(2016)が開催され、平成10(1998)年、大阪市中央公会堂での「テクノセラピー～こころとからだの美術浴～」の総合プロデュースもしている。その「モリムラ@ミュージアム」開館第二回目の展覧会が、「モリメール あなたも『フェルメール』になれる」展である(6月30日まで)。

フェルメール(1632～75)は大阪市立美術館で展覧会が開催されてきたが、「モリムラ@ミュージアム」では、フェルメールの《絵画芸術》《真

珠の耳飾りの少女》《牛乳を注ぐ女》をテーマとした三部作と、作品制作に用いたセットが展示され、誰もが自由に「あなたのフェルメール作品」を撮影できるほか、一日三組限定で専属の写真家とスタイリストが、観客を森村作品のなかのフェルメールの世界に誘う変身ワークショップ「モリメール写真館」(毎週日曜日のみの開催、予約はキャンセル待ち)も開かれている。

個人美術館であり、開館日は会期中の毎週金曜、土曜、日曜の3日間、開館時間も正午12時から夕方6時まで。住所は大阪市住之江区北加賀屋5-5-36。詳しくは「森村泰昌」芸術研究所のホームページ(<http://www.morimura-ya.com/>)を検索されたい。

ところで、森村さんはなによりも大阪を愛し、特に洋画家の小出檜重(1887～1931)が随筆に書いた“温気”を、いつも大阪の芸術の重要なキーワードにあげておられる。

“温気”の説明は、別の機会を期したいが、小出が「この関西殊に大阪の温気によって成人した大阪人は、まだわれわれの窺い知ることのできない次の芸術と特殊な面白い文化を産み出しつつあるに違いないことだろうと思っている」(「春眠雑談」)と述べている所、森村さんその人とその芸術を予見した言葉に思えてならない。

表紙にかかげた、森村作品の原作であるフェルメールの《牛乳を注ぐ女》には様々な解釈があり、森村さんの作品タイトル《フェルメール研究(わが町に何を注ぐか)》にも、きっと深い読みと問ひかけが籠められているはずである。しかし、タイトルを見て最初に、牛乳びたしになったコンフレクのようなパリパリの大阪の街を、私は連想してしまった。それも私が育った大阪の“温気”のせいかもしれない。



森村泰昌《肖像・ゴッホ》(1985年)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼殿堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。